

**ラルフ・エリソン"Flying Home"と又吉栄喜『豚の報い』に  
見られる土着性のシンボルに関する比較考察**

**A Comparative Atudy of Local Symbols  
in Ralph Ellison's "Flying Home" and  
Eiki Matayoshi's "Buta-no-mukui"**

**追 立 祐 嗣**

**Masatsugu Oitate**

## ABSTRACT

This paper demonstrates the importance of "local symbols" in two short stories: Ralph Ellison's "Flying Home" and Eiki Matayoshi's "Buta-no-mukui." Ellison's tale is set in Alabama (southeast U.S.A.) and is written in English, with dialog exhibiting the local speech. Matayoshi's novella is set in Okinawa, is written in Japanese, and similarly incorporates the local speech. Local, garbage-eating animals are used symbolically by the authors in order to enable the protagonists to experience purification of the soul and reestablishment of the true self.

In "Flying Home," the local symbol is the buzzard. The black protagonist Todd crashes his training plane in rural Alabama. Through the attentive care given by Jefferson, a local black man, Todd gradually comes to accept the "buzzard," which for Todd had been a detestable symbol of "jim crow." Through that acceptance, Todd finally recovers his sense of self-identity.

In "Buta-no-mukui," the local symbol is the pig. The protagonist Shokichi leads three women to his native island and, through their intense suffering brought on by digestive upset after eating rotten pork, Shokichi and the women experience healing of their psychological pains and, as a result, achieve their respective self-establishment.

The similarity between the two short fictions is that the protagonists experience intense suffering associated with the local symbols. Specifically, the buzzard and the pig cause the respective protagonists to vomit out painful memories deeply hidden in their hearts and finally enable them to achieve purification of the soul. The outstanding element in these two stories is that the authors had local symbols play essential and indispensable roles in the cathartic suffering of the protagonist: the vomiting, the purification, the healing, and the final recovery of self-identity.

## 序論

本稿の目的は、ラルフ・エリソンの初期の短編 "Flying Home" (1944)と、又吉栄喜の芥川賞受賞作「豚の報い」(1995)の二つの作品に、いわゆる「土着性」のシンボルとして登場する "buzzard" (アメリカハゲタカ) と「豚」が、それぞれの作品の登場人物が内面の浄化及び本来の自己の確立を経験していく過程において、いかに重要な役割を果たしているかを検証することにある。<sup>1</sup>

まず、二つの作品の概要を紹介したい。"Flying Home" は、主人公の黒人青年 Todd が、飛行訓練中に buzzard と衝突し、南部の土地へ墜落するが、同じく黒人の老農夫 Jefferson の優しさに触れる中で、当初は忌み嫌っていた、黒人の象徴としての buzzard を次第に受け入れ、最終的に自己のアイデンティティーを回復する姿を描いている。一方、『豚の報い』は、スナックへの豚の闖入により魂（マブイ）を落とされた和歌子を救うために、主人公の青年正吉が女性達を正吉の生地である真謝島へと案内するが、そこで再び豚による食中毒などの試練を経て、正吉と女性達が魂の癒しを経験し、自立を果たす姿を描いている。

この二つの作品に共通することは、いずれも、主人公達が「土着性のシンボル」により苦しい経験をし、その試練を経て、各人物の内面に抑え込んでいた負の記憶を吐き出すことによって癒されるのであるが、重要なことは、このような浄化は、他でもない、試練を与えた buzzard と豚によってなされるということなのである。

以下本論では、"Flying Home" における buzzard の役割を、Todd の墜落、Jefferson との会話、過去の記憶への回帰、そして最終的な浄化と自己の受け入れを中心に考察し（Ⅰ）、次に、「豚の報い」における豚の役割を、魂（マブイ）落とし、女性達の告白、過去の負の体験への回帰、そして最終的な浄化と主体性の確立を、"Flying Home" との比較を交えながら考察し（Ⅱ）、両作品に見られる「土着性のシンボル」の共通点を明らかにしたい。

### Ⅰ. "Flying Home" における "buzzard" の役割

"Flying Home" の作品前半部分で果たす buzzard の役割は、まさに作品のタイトルが示しているように、Todd を "home" へと導くものである。すなわち、Chikwenye Okonjo Ogunyemi が "the 'old' young man . . . who flies from *home*, his black identity and his roots" (304, emphasis added) と形容する Todd は、それまで自分が黒人であることに負い目を感じ、ひたすら白人の上官に認められることによってのみ自らの存在の意味を求めていたが、ある日、飛行訓練中に起こった buzzard との衝突により、「故郷」である深南部のアラバマの土地へと「落とされる」のである。Todd は、"That buzzard knocked me *back* a hundred years" (151, emphasis added). と感じるが、これまで常に上昇志向に縛られ、自らのアイデンティティーを喪失した状況から、本来の土地へと「戻され」、足首の骨折のために数時間を Jefferson と過ごすことにより、本来の自己を回復することができるようになる。この意味において、Todd の "landing and falling" (148) は、Joseph F. Trimmer の言う "fortunate fall" (176) なのであり、buzzard の役割は極めて大きなものである。

ここで、buzzard がアメリカ黒人の文化の中でどのような位置を占めているかについて、Susan L. Blake の説明を紹介したい。

The buzzard is a common figure in black folklore, representing sometimes the black person scrounging for survival, sometimes his predators, and always the precariousness of life in a predatory society. In one story, told by Mrs. I. E. Richards, the buzzard is represented as a bird that flies higher than the average but has to come down to get food; this story is told to impress children that "regardless of what you might have . . . we all have to live on the same level." All these folk associations are active in the references to buzzards in "Flying Home." (83-84)

すなわち、buzzard は、アメリカ黒人の歴史の中で、その苦難と生存のための闘いを象徴するものとして多くの民話に登場してきており、「土着性のシンボル」の役割を担ってきたのである。そして、Blake の上の指摘にもあるように、エリソンは、"Flying Home" の中で、buzzard が象徴する様々な意味を巧みに用いていると言える。

まず、Jefferson は、Todd が buzzard と衝突して墜落したのを知るや否や、"They's lots of [buzzards] around here. They after dead things. Don't eat nothing what's alive" (155). と言うが、これは、Todd がその精神の健全さにおいて "dead thing" であることを暗示するものである。さらに Jefferson は、buzzard は "bad luck" (155)<sup>2</sup> であり、"jimcrow" と呼んでいることを告げる。Todd はこの時点で自分が "jimcrow" であることを否定しているが、後に黒人としての本来の姿を回復することを考えれば、ここでの "bad luck" は、先にも述べた "fortunate fall" 同様、最終的には「幸運への転換」を示すものなのである。Jefferson はその後次のような話をする。

"They the damndest birds. Once I seen a hoss all stretched out like he was sick, you know. So I hollers, 'Git up from here, suh!' Just to make sho! An', doggone, son, if I don't see two old jimcrows come flying right up *outa that hoss's insides!* Yessuh! The sun was shinin' on 'em and they couldn'ta been no greasier if they'd been eating barbecue!" (155, emphasis added)

馬の死肉を貪り食う buzzard のことを Jefferson は話すのであるが、その前に Jefferson は、Todd が墜落してきた時の様子を、"When I seen you coming down in that thing with it a-rollin' and a-jumpin' *like a pitchin' hoss*, I thought sho you was a goner" (154, emphasis added). と述べ、ここでも Todd と馬とを重ね合わせている。さらに、「作り話」だと言う Todd に対して、Jefferson は、"Nawsuh! Saw [the dead horse] just like you" (156). と言い、馬との重なりを強調する。この時の Todd の反応は、"Todd thought he would *vomit*; his stomach quivered" (155, emphasis added). というものであり、黒人としてのアイデンティティーを否定してきた自らの虚偽性あるいは仮面性、さらには「土着性のシンボル」である buzzard に内臓を食われることに象徴される自らの空虚感を、身体の反応により認識している。それゆえ Todd は、激しい「嘔吐感」を憶えるのであるが、この「嘔吐」という行為は、Todd の内面の深い部分に溜め込んでいた意識の負の部分を「吐き出す」ことであり、実際に物語の後半部分での Todd の自己回復を暗示する表現なのである。

さて次に、Todd の自己回復に大きな関わりを持つ Jefferson の役割であるが、Jefferson の語り、特に「天国に行った話」は、Todd の「内面の吐き出し」に大きな影響を与えている。それは、他

でもない、Jefferson 自身が、過酷な状況生き延び、その精神の健全さを保つために創造した話であり、この話の中で、Jefferson 自身も「内面の吐き出し」を行うからである。天国に行った Jefferson は、"[Black angels] tole me I better come down 'cause us colored folks had to wear a special kin'a harness when we flew" (157-58). という差別待遇が天国にも存在することに率直な「怒り」を憶え、"So I said to myself, I ain't gonna be bothered with no harness! . . . So I starts to flyin'. Hecks, son, . . . you know I had to let eve'body know that old Jefferson could fly good as anybody else" (158). と、決意する。このように "harness" という障害物を身に付けることを拒否し、自然な翼で大空を「自由に」飛び回る Jefferson は、「子供」のような「純真さ」を保っている人物であるが、同時に、黒人の置かれた過酷な「現実」の存在にも関わらず、あるいはそれ故に、常に逞しい「笑い」を交えて「内面の吐き出し」を行っているのである。

この二つの Jefferson の話は、結果的に Todd の自己認識への出発点となる。すなわち、第一の「馬から buzzard が出てきた話」では、Todd は自分の「実体の無さ」や「空虚感」を認識し、また自分に喩えられた馬が内臓を食われてしまうことから、自己の存在の危機を感じ、"vomit" すなわち「嘔吐」という行為を行う。さらに、第二の「天国に行った話」に対しては、その中で語られる Jefferson の天国での差別への素直な「怒り」、それをものともしない自由への希求、そして時に毒を内包した逞しい笑いによる「内面の吐き出し」に触れ、自らの仮面性、そしてその結果としての「自己憎悪」の感情に耐えられなくなり、ついに Todd は、それまで内面に抑え込んでいた「怒り」を爆発させる。

His blood pounded as though it would surely burst his temples, and he tried to reach the old man and fell, screaming, "Can I help it because they won't let us actually fly? Maybe *we are a bunch of buzzards* feeding on a dead horse, but we can hope to be eagles, can't we? Can't we?" (161, emphasis added)

Todd が発した怒りは、飛行訓練部隊に所属していながら実戦に参加させてもらえないという厳然たる差別状況に対するものであるが、ここで最も重要なことは、Todd が "we are a bunch of buzzards" という極めて重要な言葉を発しているということである。すなわち、Jefferson が天国で "harness" という障害物を身に付けなければならなかった状況と自分の置かれた現実の状況との共通性を理解し、その結果、自分と Jefferson を初めて "we" と呼び、黒人は全て "buzzards" なのであるという認識を得るに至ったのである。また、Todd は、この時初めて、"He could not be sure that there had ever been laughter there, that Jefferson had ever really laughed in his whole life" (161). と考え、Jefferson という、南部の過酷な現実の中で必死に生き延びる生身の人間の現実を理解する。そして、自分も Jefferson と同様 "a bunch of buzzards" の一員であるという、自己の受け入れを果たした Todd は、仮面性という精神の病理の根源である「幼少時の記憶」へと遡っていくことになる。

Todd は、幼い頃初めて飛行機（ただし博覧会に展示されていた模型の飛行機）を見て以来、飛行機の音を「模倣」するなど、すっかり夢中になるが、"*Td lie in the grass and watch the sky and each fighting bird became a soaring plane*" (163, italics original).<sup>3</sup> という象徴的な文が示すように、

Todd の関心は、それまで「土地の生き物」として慣れ親しんでいた "bird" から、「金持ちの白人の子供しか所有できない玩具」と母親に諭された "plane" へと変わる。このように、Todd は、次第に「土着性のシンボル」から離れていき、実際には実現不可能な「白人に近づく」という上昇志向を抱いていくのである。

幼い頃に父親を亡くし、母親の愛情にも恵まれなかった Todd は、物理的・精神的に父親・母親の不在という「痛み」を抱えている人物であるが、この空白を埋め、「痛み」を癒す役割を果たしているのが、「両性具有的性質」を持った Jefferson である。<sup>4</sup>すなわち、Jefferson は、「天国に行った話」などを通して現実の厳しさを教える父親の役割と、墜落以来常に Todd の傍にいて、優しく世話をする母親の役割を併せ持っているのである。このような性質を持つ Jefferson と共に時を過ごすうちに、Todd は様々な「幼少時の記憶」を取り戻していくのであるが、実はそれらは、他でもない飛行機に対する恐怖心を内包する記憶であった。そして、このような意識の深い部分に隠してきた「記憶」を取り戻すことによって、Todd は「南部のアメリカ黒人」としての自己の真の姿を回復していくのである。

しかし、Jefferson が果たした Todd の「自己の受け入れ」に対する役割には、「記憶」の回復の他に、もう一点、重要なものがある。それは、他ならぬ Jefferson 自身が持つ「二重性」である。すなわち、Jefferson の「二重性」とは、南部という白人中心社会の中で生存していくために身に付けざるを得ない日常の自己の姿と、そのような生き方を強いている南部社会の不条理性を笑い飛ばすもう一人の自分が存在するという意味での「二重性」なのである。このような Jefferson の「二重性」は、彼の「息子」たる Todd へと受け継がれていくことになる。すなわち、Todd の飛行機が墜落した土地の所有者である白人の Graves が、Todd を狂人扱いし、「拘束服」を着けさせた時、Todd は "Don't put your hands on me!" (171) と、明白な「怒り」の言葉を発し、さらに Graves が Todd の胸を足で踏みつけた際には、"Blasts of hot, hysterical laughter tore from his chest, causing his eyes to pop, and he felt that the veins in his neck would surely burst" (171). という行動をとるのである。この場面における Todd の「発話」及び「行動」は、以前の精神的不健全さに苦しんでいた Todd の言動とは本質的に異なるものであり、Todd は初めて「正直さ」を持って、「本来の自己のあるべき姿」を他者に向かって顕示する。その結果、ようやく Todd は自己の置かれている現実の持つ真の意味を理解すると同時に、「狂気」の世界の中で本来の自己を見失っていた自分自身の姿を明確に認識したのであり、それまでの虚偽に満ちた自分と訣別し、「新しく生まれ変わる」ことにより、ようやく最終的な「自己の受け入れ」を果たしたのである。このように考えると、物語の前半部分で Todd が「嘔吐感」を憶える場面でも暗示されていたが、この場面における Todd の「発話」及び「身体が張り裂けるほどの激しい笑い」とは、ついに Todd が自分の身体の中に長い間溜め込んできた「膿」を出したと考えるべき行為であり、Todd は最終的に魂の「浄化」を経験したということが言えるのである。

このように自分自身の「膿」を出し、精神の「浄化」を経験した Todd は、Jefferson が自分にとって「唯一の救い」であることを悟る。そして Jefferson と彼の息子が、担架に乗せられた Todd を運ぶ際には、"And it was as though he had been *lifted* out of his isolation, *back* into the world of men.

A new current of *communication* flowed between the man and boy and himself" (172, emphasis added). という認識に至る。この時 Todd は、Jefferson 親子との間に、"A new current of communication" すなわち「新しい絆」を築いているのであり、ようやく自分の同胞との間に人間同士の関係を回復している。そしてそれは、まさに「他者」と「自己」を「受け入れた」結果のものであり、それ故 Todd は、"lifted" とあるように、人間としての「高み」に置かれているのである。

この意味において、人種差別を体現する Graves が "I want you to take this here *black eagle* over to that niggah airfield and leave him (172, emphasis added). といい、Todd を "black eagle" と呼ぶのは、極めて皮肉な行為である。すなわち、buzzard に象徴される南部の黒人とみなされることを忌み嫌っていた Todd が、ようやく自らが buzzard であることを認め、自己のアイデンティティーを回復した矢先に、Todd が以前に憧れていた "eagle" という言葉を、南部の典型的な白人である Graves が発し、Todd の（少なくとも飛行士としての）立場を認めているからである。（なお、「皮肉」という点に関しては、Mary Ellen Doyle (170-71) 及び Lynn Veach Sadler (25) が、いずれも "ironically" と前置きして、上の Graves の言葉についての言及を行っている。）

Todd は、担架に運ばれていく最後の場面で、"[He] saw *the dark bird* glide into the sun and glow like *a bird of flaming gold*" (173, emphasis added). とあるように、"the dark bird" すなわち buzzard が "a bird of flaming gold" に変化するのを見る。これは、まぎれもなく、Todd が「土着性のシンボル」である buzzard に対して持っていた恥辱感を捨て去り、黒人としてのアイデンティティーを確立したことを意味すると同時に、"a bird of flaming gold" とは、Trimmer (176) が指摘しているように "phoenix" (不死鳥) を意味することは明白であり、Todd 自身の「再生」あるいは「生まれ変わり」を暗示するものである。（なお、Todd の「再生」に関しては、Robert G. O'Meally が、"rebirth" (73) という適切な言葉で表現しており、また、Todd の「生まれ変わり」については、Ogunyemi が、"Todd, being young, is eventually able to grow into *a new man*" (303, emphasis added). と述べている。）

最後に、作品全体に果たす buzzard の役割について、批評家達の解釈を交えて検証してみたい。まず、作品の表題である "Flying Home" については、Mark Busby の "[T]he title refers to [Todd's] perceived return to his racial history" (35). あるいは Sadler の "Todd's 'flying home' is, first, to his Blackness, and, second, to his humanity" (24). という指摘からも明らかなように、「人種としてのアイデンティティーの回復」と同時に、健全な精神を持つ一人の人間としての Todd の「あるべき自己への回帰」を示すものである。しかしながら、Ogunyemi による "[Jefferson] leads [Todd] back to the home he had shamelessly deserted" (304). という指摘は、誤りとは言えないまでも、"buzzard" の役割が欠落していると言わざるを得ない。確かに、Jefferson は Todd の「成長」と「再生」に大きな役割を果たしている。しかし同時に、この作品における Todd の最も大きな変化は、「土着性のシンボル」である buzzard に対する考え方の変化なのである。繰り返すようだが、作品の前半部分では、Sadler が "Todd is a buzzard/Negro 'brought low' by a real buzzard (the bird who interferes with his flight, but, mainly, himself) to find out the true nature of buzzards/Negroes, with whom he refuses to identify" (24). と述べているように、Todd は自分と buzzard の同一性、さらに

は buzzard の存在自体をも拒否しようとしている。ところが、最後の場面における "a bird of flaming gold" という表現に集約されているように、Todd の buzzard に対する見方は大きく変化している。Edith Schor は "[The buzzard] that has *knocked him out of the sky* has also *enriched him* with an awareness, an understanding, an acceptance of his racial heritage" (47, emphasis added). と述べているが、重要な点は、Todd の墜落の直接の原因である buzzard が、Todd に豊かな変化をもたらしたことなのである。Trimmer (181) や Busby (36) の言う Todd の "transformation" は、buzzard によるものなのである。また、この "transformation" とは、単に Todd の変化だけにとどまるものではない。すなわち、それは、Blake の言うように、"[Todd's] failure is in some way a victory" (84). なのである。このような、"failure" が "victory" に「転換」するという発想こそが、Todd が得た最大の教訓であり、作者エリソンが、そしてアメリカ黒人が長年の苦悩を経て獲得した「知恵」なのである。このように、"Flying Home" における「土着性のシンボル」としての buzzard は、主人公 Todd の「帰郷」をもたらすことにより、その「力」の大きさを示していると言えよう。

## II. 『豚の報い』における「豚」の役割

まず、沖縄の文化の中における「豚」の位置付けについてであるが、例えば、詩人の高良勉は、「ウーヌカミ（豚の神）」について、「神祭りや神話、神謡や民謡、民間伝承や民間信仰などの中に、あるいは私たちの何気ないシグサ＝身体表現や伝統芸能などに脈々と受け継がれている」（「批評」）と指摘しているが、又吉栄喜自身も、「沖縄の豚は悪魔払いもするし、災いの予言などもする。また沖縄の人も沖縄の神々も豚肉が大好きである。豚肉は神々が降りてくる伝統行事やお祭りには欠かせないものとなっている。豚はこのように何百年間も沖縄の人々や神々の象徴になっている。」（「随想」）、また、「沖縄の地底に大きく膨らんで固まっている力にこの豚の存在が重なっている気もするし、また沖縄の基層そのものが豚でもって象徴される。」（「又吉栄喜ワールド」41）と述べ、沖縄の、特に精神世界の中における豚の存在がいかに重要なものであるかを力説している。

「豚の報い」の冒頭は、スナック「月の浜」への豚の闖入から始まる。豚はまるで「荷物が転がってきた」(13)かのように店内に走り込み、店員と歌子の身体にのしかかり、その結果、和歌子は「魂（マブイ）を落とした」のである。この時、うろたえた正吉は「ひっくりかえり、ソファの角に頭をうった」(13)のであるが、和歌子も「胎児のように体をちぢめ」(14)ている。この「魂（マブイ）を落とした」際の描写は、"Flying Home" の冒頭部分での buzzard の「衝突」による Todd の「墜落」、そしてその後の Jefferson の世話による Todd の「子供」のような描写に共通するものである。そして、さらに重要なことは、作品冒頭の一文「豚の、スナック『月の浜』への闖入が正吉と三人の女を真謝島に向かわせている。」(7)に表れているように、「豚の報い」における「土着性のシンボル」たる「豚」が、"Flying Home" における "buzzard" と同様の役割、すなわち「豚がもたらした厄を落とすための」(7)主人公の生地 ("home") への「帰郷」をもたらすことなのである。（『沖縄タイムス』の「読書」子は、「豚という存在は沖縄では独特の文化的意味を



持っている。だから、その豚が侵入したことは何らかの神の『知らせ』である。」（「読書」と述べているが、これは、"Flying Home"に関するLynn Veach Sadlerの、"Todd is *warned* initially about his attitude as he hears a [buzzard] become 'insistent[ly] shrill' when he pushes the old man away" (23, emphasis added). という指摘と同義である。すなわち、それぞれの「土着性のシンボル」が、未だ自己を確立していない主人公達に対して、その成就のための「知らせ」あるいは "warning" を行っているということなのである。）

ここで、正吉という人物について述べたい。彼は、「琉球大学一年生の正吉」(7)と紹介されているように、まさにこれから「大人」へと向かう年齢として設定されているが、これはToddにも当てはまる。すなわち、Berndt Ostendorf が指摘しているように、Todd は "on the verge of manhood" (152) という状況にいたのであり、また Blake の言うように、"[Todd's] quest for identity is the quest for manhood" (81) なのである。Todd は「空を飛ぶこと」に異様な執着を持っているが、その実態は、作品中の "[f]lying blind" (152) という表現に示されているように、空虚なものであった。一方正吉も、「ユタというものに非常に強い関心を抱いて」おり、「大学図書館にいきりびたって、ユタの聞き取り調査集や、マブイこめの実例の本などを読み耽」(16) るほど、「知識」は備えているのであるが、実際に和歌子がマブイを落とすという事件に直面した時、「どのように何をしたらいいのか、正吉はわからなかった」(16) のである。一言で言えば、Todd と正吉は、ともに自己のアイデンティティーの確立を求め、"manhood" (大人) へと向かう過渡期にいる人物であり、この二人の物語は、自立した大人への「通過儀礼」を描いたものであるということが出来るのである。

正吉は、Todd 同様、「父親・母親の不在」という不遇を抱えている。正吉の父親は、正吉が六歳の時、漁に出たが、「鯖を針にかけ、海に投げいれたとたん、大魚が喰いつき、糸が腕にからまり、あっというまに海中に引きずりこまれ」、「腕が切れかかった無残な死体」(57)が真謝島の海岸に流れ着くという「非業の死」を遂げ、その結果、「正吉には父との思い出はほとんどなかった」(26)のである。一方、正吉の母は、正吉の生まれる前に五人の女の子を産んだため、父親になじられ、正吉を身籠った時にも、また女の子であると思い込み、「何度もおまえを堕ろそうとしたんだよ」(55)と後に正吉に告げている。ところが、正吉の母親（そして祖母と祖父）に関しては、「豚」との関わりで、興味深い事実がある。

母は夫の死後、真謝島から子供たちと一緒に祖母のいる本島の与那城村に渡った。生計のみちがなかった母は、夜逃げした祖父の豚小屋を使い、豚を飼いだした。だが、母は毎日、直径が一メートルもある大きな鍋に豚の餌を煮ていたが、かまどの火にあたり、豚の発狂したような鳴き声をあび、しだいしだいにおかしくなった。豚に独り言を言うようになった。(中略) 正吉の祖母は酒乱の夫に文句を言いながら、いつも逃げまわっていたが、ある日豚小屋の中に隠れていた時、急に産気づき、正吉の母を産んだ。母が生まれた何ヶ月か後、正吉の祖父は酒代の借金のかたに豚を差し押さえられたが、競売期日の前々日の夜中、一匹の大きな豚を小舟にのせ、海を渡り、行方不明になった。(56-57)

このように、豚と共に発狂した母親、豚小屋の中で母親を産んだ祖母、豚を小舟に乗せて行方不明になった祖父たちは、豚と密接な関係を持っている。従って、和歌子がマブイを落とした時

「咄嗟に」(20)すなわち無意識に「真謝島」と正吉が口走ったこと、また、その後の島での様々な出来事の最中に正吉がつぶやく「豚には因縁がある」(71)という言葉を待つまでも無く、正吉をその生地である真謝島へと向かわせたのは、「豚」に他ならない。これは"Flying Home"において Todd を墜落させ、彼の生地("home")であるアメリカ南部の土地への「帰郷」をもたらした buzzard の役割と同様のものなのである。

又吉栄喜は、真謝島を、「非日常的なところ」、「この世とあの世との中間のようなところ」と設定し、「登場人物が、その島で自分をさらけ出すことで自分の中身(心)を見据えるという状況を考えた」(「又吉栄喜氏に文学論を聞く」)と述べている。この点に関しても、"Flying Home"における Jefferson の語る「天国に行った話」と若干の共通点が見られる。すなわち、Jefferson も、「一度自分が死んだ時」という言葉で「話」を始め、その内容も、天国という「非日常的」な設定であるが「現実」の差別が入り込み、まさにそれは「この世とあの世との中間のようなところ」である。また、先にも述べたように、この「話」をすることにより、Jefferson 自身も現実の過酷な状況を「笑い飛ばし」、「自己の内面の吐き出し」を行うが、さらにその結果、Todd の「内面の吐き出し」にも大きな影響を与えており、Todd は正吉同様、後に「自分をさらけ出すことで自分の中身(心)を見据える」ことが可能となるのである。

さて、ここから、「豚の報い」における真謝島での出来事を通しての各登場人物の変化と、それぞれの主体性の確立と癒しなどを中心に、作品の細部を検討していきたい。まず、真謝島へ渡る船を待つ場面であるが、「スナック『月の浜』のママのミヨとホステスの和歌子と暢子は真謝島遊漁船組合とか、オリオンビール代理店とかの看板が出ている切符販売所にたむろし、赤や紫にぬった唇を大きくひらき、笑いあっていた。」(7)とあるように、「神の島」(12)へ向かう御願(ウガン)の旅とは思えないほど、女達は快活であり、そこには「日常」の逞しい「生」と、人間味がほとばしる「性」が表現されている。そして島の民宿に着いた夜には、女達は「小蛸」、「栄螺」、「蟹」、「泡盛」などをよく食べ、よく飲んだ。また、「月が出たらうずくのよ」、「血が欲しくて」(41)などと若い正吉をからかっては、また「笑う」のである。そして正吉は、このように「子供のように」はしゃぐ女達を見て、「店の暗いシートに座っている時とは人がちがう」(35)と、素直な驚きの感情を抱くのである。

このような女性達であるが、真謝島という「非日常」の世界の中で、次第に、「日常」の生活では決して語ることのなかった「ほんとうの話」(36)を始める。それは例えば、暢子が「二番目の夫」に裏切られ、一人で子供を育てたことや、ミヨが夫の子ではない子を墮ろしたことなどである。しかし、彼女達の「告白」は、ある事件、すなわち民宿の主人が持ってきた豚の肝(チム)によって正吉と民宿の主人を除く全員が激しい下痢に苦しめられるという災難に遭うことにより、一気に加速していく。このことに関して、又吉栄喜自身は次のように述べている。

女たちの豚肉を食べるという感動が、次の瞬間一変し、腐った豚肉にあたり、下痢をするという試練にさらされる。しかし、この試練(試練という言葉は沖縄の神々の世界にはにたわしくはないのだが)をくぐり、体の中のもの全部出て、体がすっきりするのと同時に、現実(日常)で魂の中にいや応なくためこまれてきたものも洗いざらい出し、一種のカタル

シスを得る。(「随想」)

豚が沖縄の「土着性のシンボル」であるならば、その「肝(チム)」は、沖縄の文化の「核心」あるいは「魂」の比喩と考えるべきものであろう。また、女達の悩みは全て、墮ろしたり、一人で苦勞して育てたりした「子供」に関するものである。すなわち、彼女達の苦しみの出所は「お腹」(あるいは「子宮」)なのであり、これも女性という存在の「核心」の比喩である。そして、豚を食べることにより下痢という災難をもたらし、「試練」を与え、結果的に人間の心の奥深くにある「膿」を出させるという役割は、「Flying Home」において Todd の心の「膿」を出し、最終的に魂の「浄化」という役割を果たす buzzard の役割と同様のものなのである。

この「豚による試練」は、正吉にも次第に大きな変化をもたらす。ユタに関する「知識」ばかりが先行し、安易に「魂(マブイ)を込める」という大任を背負い込んでしまった正吉ではあるが、真謝島へ向かう船の中で、「胃が蠢き、胸から咽に何かがかみあげてきた。」(10)とあるように、Todd 同様「嘔吐感」をもよおすのは、自分では予想もできない自分自身の変化が起こることを、無意識に予感していたと解釈するのが妥当であろう。しかし、正吉の変化は極めてゆっくりとしたものであった。まず、豚の肝(チム)を料理した女達は「豚肉をよく食べ、泡盛もよく飲んだ」のであるが、一方正吉は、「食欲はあまりなく、豚と煮込んだ大根や昆布だけしか口には入ら」(59)ず、肝(チム)は食べなかったのである。その結果、女達のように下痢による「試練」を経て、「体の中のものが全部出て、体がすっきりする」という経験をすることもなかった。従って、動けなくなった女達に頼まれて島の診療所へと向かう際に「うっすらと正吉のたよりない影が動いている」(66)と描写されているのは、正吉が未だ自分の実体を把握していないこと、自己確立の過程に到達していないことを暗示するものなのである。

正吉の変化は、女達の変化を目の当たりにすること、彼女達の苦しみを理解することによって始まる。まず、下痢によって最も体力を消耗したミヨであるが、正吉はミヨを入院させるために「背中にせおい」(71)診療所まで連れて行く。そして看病のために泊まることになるのだが、その時のミヨの言葉は、「安心なのよ、正吉さんが側にいると」(77)というものであった。この場面では、「Flying Home」において Todd の「側にいる」ことによりその心身の苦しみを和らげようとする Jefferson の役割を、正吉が果たしていると言えよう。その夜、正吉は、ミヨの決定的な「膿出し」に立ち会うことになる。

夜十一時すぎ、臭気がひどく、うとうとと妙な夢を見ていた正吉は目覚めた。薄暗い中、ミヨは必死に点滴のチューブをはずそうとしている。チューブのあちらこちらにテープが貼り付けられている。ミヨの指はひどく震えている。正吉は簡易サマーベッドから立ちあがり、電灯を点けた。シーツが黄色や茶色に濡れている。寝巻の裾から覗くミヨの白い太股に鈍く光る黒っぽい粘液が生々しくくっついている。(80)

臭気の強い「黒っぽい粘液」を出したのは、ミヨが三人の女達の中で最も年齢がっており、それだけ、出すべき「膿」も濃いものであったということであろう。そして、「ミヨが泣きだす声」を聞いた時、「少女のようだ、と正吉は思った」(81)のである。ミヨの汚れた部分をタオルで拭いたり、下着を替えたりなどの世話をした後、正吉はミヨの、「何か夢を見てね、誰かが、子供のよ

うだったけど、私のお腹をしょっちゅうくすぐるの。私は、やめて、やめて、と言うんだけど、  
変にいい気持ちになってね、急にお腹を抱えて笑いだしたの」(82-83)という言葉を書く。ミヨは  
「夢」すなわち無意識の部分で、自分の堕ろした子供に対する、それまで抑え込んでいた母親と  
しての愛情と同時に、強い罪の意識を感じており、その双方が「膿」となって出たのであるが、  
正吉はミヨに、「罪？罪じゃないよ」(83)と、はっきりと言うのである。

診療所から民宿に戻った正吉は、次に和歌子の告白を聞くことになる。和歌子は、「いろいろな  
こきざみの夢を見たような見なかったような変な時間」(88)を過ごしたが、その中で、自分の父  
や母、祖父、その他の人々が現れ、皆じっと和歌子を見詰めているのである。和歌子は、さらに、  
「瀬底大橋に身投げに行った」こと、「歯科衛生士にすてられた」こと、「子供が流れた」ことな  
どを話し、「ご先祖たちが・・・私を迎えに来たと思った」(89)と言う。それを聞いた正吉は、「和  
歌子のご先祖」が、「和歌子がこの島に来たから」、「和歌子といっしょに神様に会いに行くから喜  
んでいるんだ。和歌子が道案内人だよ」(88-89)と、「淀みなく」言葉を発するのである。それまで  
の正吉は、ユタに関する「知識」だけを持っているに過ぎず、和歌子の魂（マブイ）を込めるこ  
とに対しても、自信が持てず、また、何かにつけて女性達の現実の重さに圧倒されていたのであ  
るが、「膿」を出し切ったミヨや和歌子の姿を、「たくましく、しかしかよわい大人の女」(90)と  
して理解することができるようになっていのである。<sup>5</sup>和歌子はさらに続けて、「正吉さんやママ  
たちと島に来て、おしゃべりして、ほんとうに楽しかったのに、豚なんかに・・・でも、私たち  
をここに連れてきたのも豚なのよね」(91)と言い、「こんなに不安になる時間なんてなかった」(92)  
とも告げる。すなわち、和歌子は真謝島という「非日常」の世界での思いがけない経験に感謝す  
る気持ちになっているのである。翌日、和歌子は「私、何もかも吐きだしたのね」(94)と言い、  
ミヨも「古いのは何もかも出たわ」(98)と言う。そして、正吉は、このような女性達の「浄化」  
を目の当たりにすることで、「生きかえるような気がした」(93)のである。

このように、これまでは正吉の変化は主として女性達の「膿出し」と「浄化」によってなされ  
てきたと言ってよいものであった。しかし、正吉が真謝島に来た理由は、和歌子の魂（マブイ）  
を込めるためだけではなく、非業の死を遂げ、風葬のままになっている父親の骨を墓に納めるこ  
とでもあったのである。それでは、どのようにして、正吉は自分の抱える問題に立ち向かってい  
たのであろうか。再び診療所を訪れた正吉は、民宿の主人が作った「墨烏賊汁」を食べさせられ  
る。「墨烏賊汁」とは、「沖縄では体力が消耗した時などによく食べる、数センチに短冊切りした  
白烏賊の身と、白烏賊の袋からとった墨とをひと煮立ちさせた汁」(98)であり、沖縄という土地  
に根ざした、独特の文化なのである。最初は「黒い液体に白っぽい脂身が浮いているように見え」  
(98)、躊躇していた正吉であったが、父親の風葬の場所などについて診療所の医者と話している  
うちに、いつの間にか正吉の「お椀は空になっていた」(102)とあるように、ほとんど無意識のう  
ちに平らげてしまい、「ようやく何かがふっきれたような気がした」(102)のである。そして、和  
歌子は「正吉さんの鼻、真っ黒」(102)、「鼻黒豚にそっくり」(103)と言うのである。これは、正  
吉が、沖縄の「土着性のシンボル」である豚になるという、明白な変化の比喩であり、この変化  
が沖縄独自の「墨烏賊汁」を食べるという行為の結果であることを考えると、この場面は正吉に

としての「通過儀礼」の一つの「儀式」であると解釈するのが妥当であろう。また、"Flying Home" との比較で考えれば、先に挙げた Todd の "we are a bunch of buzzards" という認識（自らを buzzard すなわち南部の黒人だと認めること）に通じるものであり、正吉にとっての自己確立の出発点と言えるものなのである。

正吉はいよいよ父の骨を拾いに出かける。その場所は、診療所の医者から教えられていた通り、「高さも幅も二メートルばかりの穴」(104)であった。

数分後、正吉は背中を曲げ、暗い穴の中に入った。暗く、手探りをしながら進んだ。戦争中真謝島の人たちが避難生活をしていた全長二十五メートルばかりの壕だった。床には隆起や窪みが少なかった。天井から雫が滴り落ち、床が濡れていた。(105)

この「穴」の描写は、明らかに「子宮」をイメージしたものであろう。「背中を曲げ」た正吉は、子宮の中にいる「胎児」であり、そこに戻ることによって、正吉は「生まれ変わる」のである。

「天井から雫が滴り落ち、床が濡れていた」という描写は、「羊水」を連想させるものではあるが、この「穴」あるいは「子宮」は、「戦争中真謝島の人たちが避難生活をしていた」場所であり、まさに「生と死」が同居する場でもあったのである。また、この作品に登場する女性達の「子宮」も、それぞれの胎児の「生と死」を内包するものであり、この両者の「重なり」によって正吉は物事の「二重性」や人間の「複雑さ」を教えられ、「再生」し、成長していくのである。この点についても、"Flying Home" との類似性が見られる。すなわち、"Flying Home" の結末部分で、父親及び母親の役割を持つ Jefferson によって「揺りかご」に喩えられるべき「担架」で運ばれる Todd は、「生まれ変わり」あるいは「再生」を果たし、それまで忌み嫌っていた buzzard を「不死鳥」とみなすまでに成長を遂げたのである。

「穴」から出た正吉は、その外に父の骨を発見する。骨は、「神々しく白」(105)く、「いうにいわれぬ光沢を放ち」(105-106)、「不純なものは微塵もなかった」(106)。そのような美しい骨を見ているうちに、正吉は、「真謝島では非業な死を遂げると十二年間風葬にされるが、逆にこのような仕打ちをうけたために、父は美しく、たくましく変り、神になった」(106)と考え、「このままここに祀ろう」(106)、「ここを御嶽の形にしよう」(107)という発想にまで至る。この時ようやく、正吉は「主体性」を獲得したのである。この点に関しては、又吉栄喜自身が次のように説明を行っている。

魂のカタルシスとか癒しとかのほかに私はこの小説に「主体性」という概念を付与した。(中略) 風葬にされている父の骨を常識通り墓に納骨するという受動的だった、女たちの案内人の主人公が女たちや豚にほんろうされ、人生の意味みたいなものをかいま見せられ、純白に輝く骨や、背景の大海原に魂を奪われ、父を神にするという主体的な行為をするようになる。(「随想」)

このようにして「主体性」を獲得した正吉は、急いで御嶽を造り、女たちを御願に連れて行くことになるが、その前に、正吉には「告白」をしなければならないことがあった。「ママ、スコップを見ただろう？父の遺骨があったから御嶽を造ってきたんだ。俺は自分を救うのが精一杯だ。・・・この島には本物の御嶽がたくさんあるから、申しわけないけど、あなたたちのいいよう

にしてください」(114)。ようやく正吉は、以前のユタに関する「知識」だけの頼りない正吉から、自分の本来の姿を受け入れ、それを正直に他者へ告げることのできる強さを持った一人の「大人」へと成長する。そして、このような正吉の告白すなわち「膿出し」を祝福するように、女達は、「私は正吉さんの御嶽を信じるわ」(114)、「私は・・・正吉さんの御嶽に招き寄せられたんですよ」(115)と言う。そしてさらに、この正吉の告白は、これまで頑なに沈黙を守ってきた暢子の「告白」を引き出すのである。

「正吉さん、私、グソー（あの世）にお土産を持たせたいんだけど・・・」

「お土産？」

「玩具よ。よく遊んでいたの。持っていつてもらえるかしら？」

「だいじょうぶだよ」

「お願いします。遊びざかりの、六歳だったんだから・・・」

暢子は泣きだした。(116)

暢子もまた、子供の「生と死」という「子宮」の苦しみを抱える女性であった。そして、このように長年心の奥底に溜め込んでいた「膿」を吐き出すことにより、女達は癒され、「主体性」を獲得していくが、それは、「自分の力で自分を救う」ことなのであり、「主体性と魂の癒しというのはつながっている」(又吉、「随想」)なのである。そして、それを間接的にせよ引き出した「豚」の役割は極めて大きい。それは、沖縄あるいは真謝島の持つ「土地の力」(又吉、「又吉栄喜ワールド」42)なのである。

「豚の報い」の最後場面は、正吉が造った御嶽に、正吉、ミヨ、和歌子、暢子、民宿のおかみが向かう描写で終わる。

五人の頭に地表の生き物から生気を吸い取るような陽がじりじりと降り注いだ。草花からは鮮やかな色が消え、虫は穴ぐらや葉陰にじっと身を潜めていた。五人の両脇の岩陰からポツンポツンとアダンの木が首を出していた。正吉が先頭に立ち、暢子と和歌子が並び、すぐ後にミヨが、最後におかみが続いた。地面に落ちた五人の黒い影もゆっくりと進んだ。(120)

この描写には、「神々しさ」という形容が最も相応しいものであろう。「草花」や「虫」などの「生き物」が、あたかも畏怖の念をもってこの五人の「人間達」を静かに見守っている。「地面に落ちた五人の黒い影」という表現も興味深い。文学作品において「影」とは、「もう一人の自分」、あるいは「実体の無さ」などの象徴として用いられることが多いのであるが、ここでの五人の人物達は、「膿」を出し切り、「癒し」を経て「主体性」を確立し、「統合された人格」を獲得している。従って、単に「五人がゆっくり進んだ」とするよりも、敢えて主体を描かずに「影」を用いることで、人物の崇高さが一層強く表現されているのである。

さてここで、なぜ、この最後場面、民宿のおかみが「五人」の中に入っているのかという問題について述べてみたい。<sup>6</sup>結論から言えば、おかみは、"Flying Home"における Jefferson の役割を、最も明確な形で果たしているということである。まず、Todd が墜落した「故郷」で生活し、Todd の世話をする Jefferson 同様、おかみも正吉の「生地」である真謝島で民宿を営み、正吉たちの世話をする。正吉たちが島に着いた夜、おかみは「根が生えたようにどっしりと座っ」(42)

て女達と酒を酌み交わし、様々な「話」を語り合う。次に、見逃してはならないのは、その直後に起こった、おかみの「落下」である。「月だよ、月だよ、大きな月だよ」と、あたかも子供のような純粋さで危険など顧みず、「窓から大きく身をのりだして」いたおかみは、「あっというまに窓の向こう側の暗闇に消えた」(44)のである。これは、Jefferson が「天国に行った話」の中で、やはり子供のような純粋さで空を飛び、最後には白人の天使によって天国から「落とされる」とと本質的には同一の内容である。また、おかみは、Todd に子供に対するような献身的な世話をする Jefferson 同様、一緒に入院しているミヨに対して、まるで子供を諭すように、正吉に泊まるように指示したり、ミヨが下着を汚した際には、「ママに下着を着けさせてちょうだい」(81)と強い調子で正吉に言うのである。さらに注目すべき点は、この作品の中で「豚」と重なる描写がなされているのは、正吉の母親（及び祖父と祖母）を除いては、墨烏賊汁を食べて鼻が黒くなった正吉だけであるが、おかみも、「うちがこんな豚になる」(100)と自ら述べているように、「豚」すなわち「土着性のシンボル」として描かれている。（再三引用しているが、Todd が "we are a bunch of buzzards" と言う際には、Todd のみならず Jefferson も、"Flying Home" における「土着性のシンボル」である buzzard であることを意味している。）作品の結末近くの部分で、すっかり癒された正吉と女達との会話の中で、和歌子がおかみに、「もとはといえば、おばさんのおかげよ」、「そう、おばさんが窓から落ちて、怪我したから、おじさんはお礼に私たちに豚肉を届けた」(118)と言う。豚の「厄」をもたらしたきっかけは、おかみの「落下」であり、その結果としての「膿出し」という「試練」を経て、正吉たちは「主体性」を獲得したのである。ただ、おかみは Jefferson 同様、「そうかね？そういうもんかね？」(119)と言うばかりであり、理性的あるいは論理的に自らの価値を理解する人物としては設定されていない。そして、そのような「純朴さ」のゆえに、おかみも Jefferson も、二つの作品の「神々しい」結末の場面に、極めて大きな意味を持って登場しているのである。

## 結論

以上見てきたように、ラルフ・エリソンの "Flying Home" と又吉栄喜の『豚の報い』には、様々な共通点がある。まず第一に、"Flying Home" における "buzzard" はアメリカ黒人の多くの「民話」に登場しており、「豚の報い」における「豚」は、同じく、沖縄の「神話」や「民間伝承」などの中に受け継がれてきており、ともにアメリカ及び日本という国の中に位置しながら、独自性の濃い文化を持った土地の「土着性のシンボル」としての役割を担っている。そして、それぞれの「土着性のシンボル」によって、二つの作品の主人公達は、「試練」にさらされ、魂の「癒し」を得、最終的に「本来の自己の回復」あるいは「主体性の獲得」を果たすのである。

作品の「すじ」に関する共通点としては、"Flying Home" の主人公は buzzard との衝突により「故郷」の大地へと「落とされる」が、『豚の報い』の主人公も、豚の闖入によって「生地」の島へと「戻される」。すなわち、buzzard と豚は、それぞれの主人公を、彼らの存在の「原点」というべき土地へと「導く」役割を果たしているのである。"Flying Home" の Todd も、「豚の報い」の

正吉も、父親・母親の不在という不遇を抱えているが、彼らがそれを乗り越えて成長していくためには、そのような「存在の原点」と呼ぶべき「故郷」あるいは「生地」に立ち返り、幼少時の記憶を辿るという、いわば「先祖返りの旅」が必要だったのである。そして、その「旅」の中で、主人公達はそれまでの偽りの自己を脱ぎ捨て、次第に本来の自己のあるべき姿を取り戻していくのであるが、両作品に共通するのは、その過程が、「嘔吐」や「下痢」などの動作に象徴される、それまで心の深い部分に抑え込んできたもの、すなわち「膿」を出すという行為によってなされるという点である。そしてその結果、主人公達は魂の「浄化」を経て、最終的に「生まれ変わり」あるいは「再生」へと至るのである。

最後に、「土着性のシンボル」としての buzzard と豚の持つ「力」についてであるが、一言で言えば、それは「災難」を「祝福」へと転換させる力である。"Flying Home"における「墜落」をもたらした buzzard は、最終的に「不死鳥」へと変り、Todd の「再生」を祝福する。一方「豚の報い」の豚は、「魂（マブイ）を落とす」という「厄」や、多くの登場人物に「下痢」という「試練」をもたらすが、やはり最終的には「感謝」される存在へと変化するのである。それ故、両作品の最後の場面が、「神々しさ」を感じさせるものになっているのは、buzzard や豚がもたらした「災難」があったが故のものであり、「報い」という言葉に込められた、「逆境」から「崇高さ」への転換という、アメリカ黒人と沖縄の文化が歴史の中で経験してきた「知恵」を読み取ることができるのである。

#### [注]

- 1 ラルフ・エリソンの "Flying Home" に関しては、『沖縄国際大学外国語研究』第6巻第1号（2002年9月）に、拙稿「Ralph Ellison's "Flying Home" における Jefferson の両性具有的性質」を掲載した。上記論文では、Jefferson が Todd の精神的成長に果たす父親及び母親としての役割に焦点を当てた。今回の論文における "Flying Home" に言及した部分（I）では、Todd の主体性の確立に果たす buzzard の役割に焦点を当てているが、この作品における Jefferson の役割はあまりにも大きなものであり、上記論文と若干の重複する部分があることをお断りしておきたい。
- 2 "Flying Home" からの引用は、「引用資料」に掲げた *Flying Home and Other Stories* からのものであるが、この "bad luck" の箇所は、"had luck" となっている。"Flying Home" を収録した他の短編集や批評家の文章などから判断して、明らかに、この "had luck" は "bad luck" の誤りであると判断されることから、ここでは "bad luck" を用いた。
- 3 註2と同様、この引用箇所の中の "fighting" は、「引用資料」の版では "flighting" となっているが、註2と同様の判断基準から、明らかにこの "flighting" は "fighting" の誤りであると判断されるため、ここでは "fighting" を用いた。
- 4 Todd の「父親・母親の不在」及び Jefferson の「両性具有的性質」については、註1に挙げた拙稿「Ralph Ellison's "Flying Home" における Jefferson の両性具有的性質」に詳述してお



り、参照されたい。

5 『豚の報い』文庫版の「解説」で、崔洋一は、「和歌子のかつて死線を彷徨ったらしい得体の知れない生命力」(234)と、優れた分析を行っている。

6 ちなみに、田場美津子も、おかみの存在に関して、次のような関心を示している。

登場する女性たちの中で、民宿のおかみに歯ごたえを感じた。キリスト・釈迦・火の神とたくさんの神々をまつり、どの神も信じているという大らかなおかみ。(中略)腰を痛めたうえに食中毒まで患い、他の女性たちよりひどい目にあうがへこたれない。正吉が新しくつくった前代未聞の御嶽まいりには、念入りに化粧し牛フンで野犬を追い払いながらついてゆく。(「ウーマン I N ストーリー」)

## 引用資料

Blake, Susan L. "Ritual and Rationalization: Black Folklore in the Works of Ralph Ellison." *Ralph Ellison*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986. 77-99.

Busby, Mark. *Ralph Ellison*. Boston: Twayne Publishers, 1991.

Doyle, Mary Ellen. "In Need of Folk: The Alienated Protagonists of Ralph Ellison's Short Fiction." *CLA Journal*. Vol. XIX, No. 1 (September, 1975). 165-72.

Ellison, Ralph. "Flying Home." 1944. *Flying Home and Other Stories*. New York: Random House, 1996. 147-73.

Ogunyemi, Chikwenye Okonjo. "The Old Order Shall Pass: The Examples of 'Flying Home' and 'Barbados'." *CLA Journal*. Vol. XXV, No. 3 (March, 1982). 303-14.

O'Meally, Robert G. *The Craft of Ralph Ellison*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1980.

Ostendorf, Berndt. "Anthropology, Modernism, and Jazz." *Ralph Ellison*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986. 145-72.

Sadler, Lynn Veach. "Ralph Ellison and the Bird-Artist." *SAB (South Atlantic Bulletin)*. Vol. XLIV, No. 4 (November, 1979). 20-30.

Schor, Edith. *Visible Ellison: A Study of Ralph Ellison's Fiction*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1993.

Trimmer, Joseph F. "Ralph Ellison's 'Flying Home'." *Studies in Short Fiction*. Vol. IX, No. 2 (Spring, 1972). 175-82.

「読書」『沖縄タイムス』(夕刊) 1996年3月19日、2面。

又吉栄喜「豚の報い」(『文学界』1995年11月号。74-127頁。『豚の報い』文藝春秋、1996年。5-120頁。

——「又吉栄喜氏に文学論を聞く」『沖縄タイムス』1996年1月15日、9面。

——「随想」『沖縄タイムス』1996年1月18日、13面。

——「又吉栄喜ワールド—アメリカの影と沖縄の基層」『E D G E』創刊号（1996年春号）。38—51頁。

崔洋一「解説」又吉栄喜『豚の報い』（文春文庫）文藝春秋、1999年。228—235頁。

田場美津子「ウーマン I Nストーリー：『豚の報い』又吉栄喜著ビタミン愛たっぷりのおいしい小説」『週間ほーむぶらざ』（沖縄タイムス社）第470号（1996年4月11日）4面。

高良勉「批評：又吉栄喜著『豚の報い』」『沖縄タイムス』1996年1月8日、9面。